等問合せのため葉書を出す、過日來觀の第一高等女學校生徒有志より金貳圓寄附されたり。岡田先生來らる。入場者特別券六拾錢、普通券四圓貳拾五錢、下足料八拾八錢、繪葉書參圓九拾貳錢、總收入拾四圓六拾五錢、宿直佐藤〔勉〕久萬〔盛幸〕兩氏。

九日　午前十時、市立忍岡小學校訓導永田奥作氏來り、高等科生徒の無料觀覽を乞ふ、許可の上男女生徒百二十名を入覽せしむ。大給〔近清〕氏より一同へ鹽煎餅一袋を送らせる。昨日金貳圓を寄送したる第一高等女學校有志者へ禮狀を出すべく督促されて出す。入場者特別券十九枚、普通券四圓貳拾錢、下足料八拾五錢五厘、繪葉書四圓七拾錢五厘、宿直松林〔千里〕川北兩氏。

十日　丸野氏全快出席。入場者普通券四圓貳拾五錢、繪葉書參圓參拾九錢、下足料八拾七錢、總收入九圓七拾壹錢なり。宿直野田久萬兩氏。

十一日　入場者特別券五枚、普通券七十三枚、下足料九拾貳錢五厘、繪葉書五圓四拾參錢なり。

明後十三日　會場取片附けの爲め、磯谷〔額縁店〕に書面を出す事を中村先生に依頼す。宿直薄兒島兩氏。

十二日　午後五時閉會　黑田先生より、一同に菓子一折を恵投せらる、入場者特別券百十五枚普通券百一枚、下足料壹圓八拾九錢五厘、繪葉書六圓九拾九錢、油繪拾圓なり。繪葉書出品者及油畫にて自己所有額縁に入れたるものは各自持歸れり。

十三日　委員一同會場取片附け、出品畫運搬に盡力せり。

以上記事の如く、黑田、岡田、中村、及其他諸先生委員一同の盡力を以て、意外の好成績を得。無事閉會したるは、西洋畫科一同の深く欣ぶ處なり。

この記事によれば教官、在校生のみならず卒業生も応援出品したことがわかる。同誌第二巻第九号には同年七月七日、収益三五二円七〇銭を献納したことが記されている。

② 白井雨山帰国

明治三十七年二月二十六日、白井雨山が帰国した。雨山はパリに滞在し、また、イタリア、ドイツ、ベルギー、ロンドン等へも旅行し、彫刻の技法や教育方法を研究した。パリではカルチェ・ラタンのホテル、スーフローに中村不折、和田英作、下田次郎らと同宿していた（下田次郎「旧友白井雨山君を憶ふ」『雨山先生遺作集』昭和四年）。留学中の雨山の消息は『東京美術学校校友会月報』第一巻第二号、第十号の通信欄に一部分が掲載されており、『美術新報』などにも多少の記事が載っているが、詳細は不明である。ただ、『美術新報』第一巻第六号（明治三十五年六月五日）に「白井保次郎氏は目下アンジャルベー氏のアトリエに通学なし居る由」という注目すべき記事があり、これは同誌第一巻第十三号（同年九月二十日）所載久米桂一郎著「仏国現代の美術(八)」に「十七世紀に於けるヴェルサイユ技法の潤濤豪華なる装飾構図の意を採らんとするもの」として掲げられているアンジャルベール（Injalbert）に雨山が師事したことを示している。また、同誌第三巻第十四、十五号（明治三十七年十月五、十日）には東京彫工会に於ける雨山の帰国講演の記事が載っており、その中で雨山はヨーロッパに於ける彫刻の需用の盛んなことや奨励法が

整っていること、制作者が非常に誠実に忍耐強く研究していることなどに大変感動したことを述べている。

雨山は帰国後直ちに教授となった（三月十五日）。当時研究科に在籍していた高村光太郎はロダンに関する思い出の中で次のように述べている。

私がロダンの名をはじめて聞いたのは明治三十六年頃だつたと思ふ。其頃はロヂンと發音してゐる人もゐた。丁度東京美術學校彫刻科を卒業して研究科にゐた頃のことであつた。フランスから彫刻科の助教授白井雨山先生が歸朝せられて、其の新知識をいろいろ生徒に披瀝せられた中にロダンの名があつた。私は既に彫刻科を卒業したものの、彫刻についてはまだまるで暗中摸索の狀態で、どんな新知識の一片にでも飢ゑ渇いてゐた時であつたから、何でも根掘り葉掘り先生にいろんな事をたづねた。フランス彫刻の寫眞も多數持つて歸られたが、その中にロダンのものはなかつた。バルトロメとか、カルポオとか、ダルウあたりのものを見せられたやうにおぼえてゐる。先生は教室で私の油土の彫塑を見て、「君の作風は細かにきれいに仕上げる方だからロダンの行き方とは違ふ。ロダンは狂人のやうな彫刻家で、奇矯な作をつくる。あんなまねは爲ない方がいい」といはれた。作風が違ふといはれると、その違つた作風が知りたくて却て甚だしく好奇心をそそられた。

（『高村光太郎全集』第七巻。昭和三十二年筑摩書房）

③ 白浜徴の留学

明治三十六年七月三十日、白浜徴は満三年の欧米留学を命ぜられ、翌三十七年三月十八日に出発した。正木直彦の期待を担って新しい図画教育のリーダーに相応しい知見を得るためであり、図画教育界ではこれが最初の国費留学生であった。同年五月、白浜はマサチュセッツ州立図画師範学校(Higher Nomal Art School)に入学。セントルイス万国博に出かけたり、ボストンでは岡倉天心や六角紫水らとも交流があったようである（282頁書簡参照）。

マサチュセッツ州立図画師範学校はイギリスから招かれた Walter Smith のプランによって一八七三年に出来た学校で、白浜がここで具体的にどのような勉強をしたかは不明であるが、帰国後の著述等から判断して白浜は同校やボストン、ニューヨークの図画教育の思潮に多くを学んだ様子である。当時はフェノロサが米国各地で日本美術、美術教育に関する講演を続けており、フェノロサの説に共鳴してフェノロサ＝ダウ方式と呼ばれる日本画を採入れた革新的な図画教育法を樹立してコロンビア大学で活躍していたダウ Arthur Wesley Dow (1857～1922) が居て、ボストンやニューヨークの図画教育界で支持されていた。白浜もコロンビア大学でダウの幻灯を使用した講義を聴き感銘を受けたらしい。ダウと白浜の関係については金子一夫著「続・日本の近代美術教育史」〈9〉〈12〉（『美育文化』第二十八巻第七号。昭和五十三年七月、同第十二号。同年十二月。美育文化協会）および「アーサー・ウェズレイ・ダウの鑑賞教育」（『美術教育論ノート』同五十七年六月。開隆堂出版）に論攻があるが、金子氏は後者に於いて、「白浜は帰国後、国定教科書『新定画帖』の編集に参加し、多くの新教材をもたらす。シルエット画、『位置の取り方』